

地蔵記



中村隆資

地藏記

中村隆資

文藝春秋

地蔵記

一九九二年三月二十日 第一刷

著 者 中 村 隆 資

発 行 者 豊 田 健 次

発 行 所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話代表(〇三)三二六五一一二二一

印刷所 大 日 本 印刷

製 本 所 矢 嶋 製 本

定価は、カバーに、表示されています
万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

地	流	目
藏	離	次
記	譚	
89	5	

カバー絵
「座頭」(町田市立博物館蔵)
装丁
坂田政則

地
藏
記

流
離
譚

一

三条堀川の遊女屋を命からがら逃げ出したおれたちだが、飢えと疲れと咽喉の渇きで、重い荷車を抱えたまま、枚方^{ひらかた}在の坂道で、どうにも動きがとれなくなった。

おれたち、というのは、おれと竹阿弥^{ちくあみ}と二人の遊女。細川、山名の大戦^{おおいきさ}のとばっちりを受け、手に手を取って都を逃れた四人組だ。応仁元年から足かけ十一年も続いたあの大乱の本番を、おれたちはその遊女屋で知ったことになる。

一里とは隔てぬ所で東西の軍勢が睨み合っているときに、いい気なものだと言われればそれまでだが、よほど戦馴^{いくな}れしていない者を除けば、都雀^{みづすずめ}のおおかたは、これもいつもの空騒^{からさわ}ぎ、とたかをくくっていたはずだ。細川勝元率いる東軍が二十四万六千人、かたや山名宗全^{そんぜん}入道の西軍は二十万九千人。日本全土の兵を集めたようなもので、ちょっと見はおどろおどろしいが、あいつらはそのときまで、もう半年も睨み合っていたのだ。

それもそのはずで、これほどの大軍をうかつに動かせるわけがない。わずかな破綻が生じれば即座に全軍の命取りにつながることは両軍の大將もよくよく承知している。小競り合いこそはではいいが、内実はびくびくものの対陣とは事の始まりから見えていたことだ。

その年の正月十六日、門松とれて屠蘇とその酔いも醒め、己れが戦していることをにわかに憶い出したか、あるいは小正月こしょうづつの祝い酒に乱酔したのか、畠山義就よじなりと山名の兵が、上御霊社かみのごりょうしゃに立て籠かっていた管領畠山政長の軍に突如夜襲を仕掛けたのが、この乱の皮切り。親分の勝元が救けを寄こさないのに業を煮やした政長は、御霊林ごりょうりんの社殿に火をかけ、発つ鳥あとは脱糞のまま逃げ去った。

こうして戦の皮は切られたものの、皮を切ったそのあとに汁一滴も出る気配がない。初戦に圧勝して西軍の氣勢は大いに上がったが、東軍はヤドカリさながら、そここの大名屋敷や公家の邸を占拠して居すくんでいるばかり。「勝元も坊っちゃん育ちの骨のひ弱さ」と、西方の宗全入道の鼻息はたいそう荒かったが、能天気な入道と違って細川管領は秀才らしい慎重居士あちらに義理かけこちらを脅し大名連を利で釣って、敵に倍する兵力を集めたと見て、はじめて鍋矢かぶらやを放たせた。

とはいうものの、その戦というのが何のことはない火つけ合戦で、大名や公家の邸に立て籠った両軍が、敵方の陣地を潰すため火矢を射ち合うという、まるで洩はなたれ餓鬼どもの印地打ちいんぢうちのような戦いぶり。これならば槍も刀も要らぬだろう、と京童きやうわらべたちは嘲ったものだが、天に向かつて唾するとはこのこと、五月末のこの火つけ合戦で上京かみきやう一帯が焼けた。

すれっからしの京者きやうものも、これはいつもと様子が違う、と慌てて荷物などまとめ出すが、それ

から十日ばかり何も起こらぬ。いったんは鞍馬の山や叡山に逃げ込んだ連中も、静まりかえる京洛を眼下にすれば拍子ぬけし、あの人数相手に商い続けぬ手はないと、恐さ四分に欲六分、欲が勝って下りてくる。

取られ焼かれて困る連中は、あちらへ逃げ出しこちらへ帰りで心穏やかならぬことしきりだが、おれと竹阿弥のように悟りの境地に達するしかない者は、そのあたりは恬淡たるもの。親なし妻なし子供なし、金も門地も土地もないというあつけらかんとした境涯で、物に執着しようにも、持ち物といえば天から与えられたこの命一つ。音に聞く不二の高嶺を吹き渡る涼風よりもあつぱれ心すがすがしく、心頭を滅却するよりこれは強いはず。失って困る身分や所領がある奴らは、持ち物に執着し、どろどろになって生きる氣力が湧くだけ幸せなもので、將軍家を筆頭に、細川・斯波・畠山など、いま京を舞台にワアワアやっているのがその手合い。この戦も、此奴らの兄弟、叔父甥、養兄弟の骨肉あい食む家督争いがもとというから、馬鹿らしさもひとしおだ。どうせ血筋や身分でがんじがらめの世の中、戦するなら早くやるがよい、この世がすべて吹っ飛ばせば、さぞや面白かろうと、あてどないその日暮らしの反動からか、おれたちのような有象無象は、すでに自棄くそ氣味で大乱を待ち望む氣も強い。

とは思ふものの、皆が滅べばともに滅びもしようが、己れのみ死に他人が生きてるのは面白くなく、さして楽しい生でもないが、もちろん、わずかに手にする命ばかりは惜しいわけで、焼

け死、斬られ死などまっぴら御免。とはいえ、明日は我が身の枯れ野草、火をつけられ斬りたてられればそれまでだが、こう見えても鴨の流れで産湯をつかった根っからの都育ち。京を離れて行くあてもなし、尻に火がつきそうになりながらも都に止まり、せめて生きているうちに酒を喰らい女を抱いては、憂き世の成り行きを横目で睨むしかない。

その頃、おれは節目の通った師匠を持たぬはぐれ者の連歌師。竹阿弥は、これもどういうわけか一匹狼の狂言役者で、ともにわずかな鼻唄すじの祝儀や大道芸、賭け連歌などで食をつなぐ暮らしを続けていた。

竹阿弥を初めて見たのは大蔵八右衛門の興行の舞台で、奴はその日、客演の形で『狸の腹鼓』の狸師役を演じていた。この演目は、牝狸が尼に化けて狸師を誑かし殺生を思い止まらせたいものの、ついに化けの皮が剥がれるが、哀願して命を助けてもらい、礼に腹鼓を打つという筋。狂言の重習物の一つで、題名の阿呆らしさのわりにはかなり高度な技を要求される。ワキとはいえ、狸師の役者は、シテの狸の変化に応じて、はじめの尼にはうやうやしく、狸と分かって後は怒り出し、赦すときには慈悲深く、腹鼓を聞くときは天真爛漫にうち興じるという、めりはりの効いた演技を要求される。シテの狸の滑稽さが活きるか死ぬかは、一にワキの受け方にかかっているわけだが、その舞台のワキは光っていた。シテを引き立てるとともに、自ら

も飄逸な味で舞台の空間にすつくと立っている。このワキ、かなりの役者である、華もあり、シテを演じる力も十分持つ者と、おれは見た。

ふたたび竹阿弥を見たのは、やや大きな連歌の座で、たまたま最前の商人に連れてこられた奴の名を、おれはそこではじめて知った。「人数の多い方が座が盛り上がりましょう」などと誰かが言い出し、竹阿弥は不承不承という体で座に着いた。

最初、奴は、何でもこなものが面白いのかと言いたげに小つまらなそうな顔をしていたが、張行を始めてみれば、いくぶん誹諧連歌の気味はあるものの、ぶっきら棒ながら、詞付を多用した剽けた句を詠んで、一座を興がらせた。

連歌師と狂言師の違いはあるものの、どこか一脈通じるものをおれは奴に感じたが、あとで聞いてみれば、竹阿弥は妙心寺の稚児上がり。坊主になるやならずで寺を飛び出し、狂言の世に身を投じたとのこと。このおれも、大徳寺の稚児から僧門の末席に連なつたが、位階職制の差別厳しい僧房生活を嫌い、還俗して連歌の道に入った男。竹阿弥、僧房時代のことはあまり話しながらなかったが、それでも、寺を飛び出したというおれに親しみを抱いたらしく、瘦せ犬同士が互いの臭いを嗅ぎ合つたすえ、おそろおそろ行をとにもするような、なぜとなしにうら寂しい付き合いが始まつた。

よほど親しくなつてからだが、四条橋詰の居酒屋で濁り酒を酌み交わしていたとき、奴は酔

った目を据えて、切るような口調で言ったものだ。「おれはな、五つのときに売られたんだ。自分の親爺にな！」

「それがどうした」と、おれは応酬した。「こちらは捨て児だぜ」

このとき竹阿弥は、犬ころが反吐をはくように、己れの出自を敢えて口にしたかったのだろう。もしかしたらそれは、おれに対する親愛の情を、奴らしい形で表わしたかったからかもしれない。だが、この囃はどうだ。目糞と鼻糞が互いに、「おれの方が汚ない」と言い張っているようなものではないか。大口あけておれは笑った。奴も苦笑した。

子捨て、子売りなど日常茶飯だ。明日の食にもこと欠く暮らしのなかで、いや、だからこそ、男と女は激しく睦む。「まるで犬だな」と、竹阿弥は毒づくが、それがいまの地下人の掛け値なしの姿だ。

憐れたすえ子供が生まれる。貧乏人の子沢山で、それまでだって子供を食わせるのがやっとだから、新たに生まれた手のかかる赤ん坊などは臍の緒で縊り殺されるか、富裕な商家や寺の前に捨てられるか、でなければ人買いに売られるかだ。

三昔も前、このおれも檻樓にくるまれて大徳寺の山門の下で泣いていた。それを拾ってくれたのが一人の老法師だ。歳をとっているわりには身分の低い僧だったが、本当の仏心とはこのような人に宿るのだらう、貰い乳しながらおれを育ててくれた。その恩人も、いまはこの世に

ない。

竹阿弥は売られた。手間のかかる赤児は売りにくいので、ある程度大きくしてから人買いに渡すわけだ。人買いは、村々を回って集めた子供たちを連れて都に上る。これは、という見目よく丈夫そうな子供は、出入りの商家や大名屋敷に直接連れていく。残りは市で売る。競りも立つが、仲買人に利鞘を取られるため、売り買い双方とも直取引きを望む。人買いは、「このころるべし」と書いた木札を立てて買い手の現れるのを待つ。日がな一日坐っていれば、これを買おうという奴がやって来る。商家や庄屋屋敷の手代、遊女屋の女将たちだ。見目よい女兒ならすえは遊女に、丈夫そうな男の兒なら丁稚や下男、作男にしようという肚だ。もちろん一生飼ひ殺し、牛や馬より長生きして安上がりでよく働くという目論見からで、仏心などてんからない。

「水子地蔵にならなかっただけましではないか」おれが言うと、奴は頭を強く振って、「どうして。わけも分からぬうちに縊り殺された方が、なんぼましだったかもしれぬ」と、痛みをこらえるように顔をしかめた。

「おれを買ったのは妙心寺の坊主だ。幼い頃、顔だちが愛らしかったので、高僧の稚児にされたのだ」

稚児は寺童ともいい、僧籍に入るにはまだ幼い年頃の子供を寺で寝起きさせ、僧になるため

の子備の修行をさせるものだが、別の意味あいもある。女人禁制の仏門で、女体の代わりに僧たちの情欲の捌け口にされるのだ。いまの時代、そんなことは当たり前だが、嫌に思う子供もいるだろう。

「そんなに嫌だったかの？」と問うと、竹阿弥は端正な顔を引きつらせ、「当たり前だ。年端（としは）もいかぬ子供をつかまえて仏に仕える者が何しよるんじや。あの生臭坊主どもめが！」と、罵声を吐き散らし、盃をぐいぐいあおった。おれはただ黙って見ているしかなかった。

少し経って、ようやく機嫌を直した竹阿弥が口を開いた。

「ぬしも稚児だったんだろが？」

「見ての通り、おれはこの饅頭顔だろう？ 坊主どももその気が失せるというものさ。それに、おれを拾ってくれた坊さんがかばってくれたしな」

もっぱら下働きの力仕事さ。おれは力瘤（ちからこぶ）を作って見せた。

「ぬしは良い人に巡り合ったな」

「うむ。あの人がいたから、おれも寺の暮らしに耐えていたようなものさ」

物心ついたおれの目に、老法師はだいぶ歳がいつているように見えたものだが、その頃、あの坊さんはまだ五十を過ぎたばかりだった。苛酷な修行と下級僧の厳しい生活が、師を年齢以上に老けさせていたのだ。